

第2回「青年国際交流事業の効果測定・評価に関する検討会」議事概要

日時：平成24年7月19日（木） 10：00～12：00

場所：中央合同庁舎4号館420号室特別会議室

牟田座長 定刻となりましたので、「青年国際交流事業の効果測定・評価に関する検討会（第2回）」を開催させていただきたいと思っております。

本日は前回同様、中川内閣府特命担当大臣及び園田大臣政務官に御出席いただいております。なお、中川大臣は公務のため、途中で退室される予定です。

それでは、中川大臣から一言ごあいさつをお願いいたします。

中川大臣 ありがとうございます。委員の皆様には改めて心からお礼を申し上げたいと思っております。

前回では、しっかり肯定的なお話をいただいて心強く思っておりますが、行政事業レビューの結果を乗り越えていくためには、民間資金の導入などを行いながら、税というものについての使い方をもっと効率的なものにしていくという角度の議論も必要になってくると思っておりますので、そういう意味での積極的な知恵を与えていただければと思っております。

今日はパタラット・ホントング公使参事官にお見えをいただいております。「東南アジア青年の船」に青春時代に参加されたと聞いており、それが恐らく、今、タイと日本の懸け橋になって御活躍をいただいていることの基本になっておられると思っております。当時の話や参加後の話を含めてお聞かせいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。

タイトなスケジュールで検討をお願いすることになっておりますけれども、どうぞひとつ活発な御議論をいただいて、結論を導いていただけますように、よろしくお願ひします。ありがとうございます。

牟田座長 中川大臣、どうもありがとうございました。

なお、本日、日本青年国際交流機構の大橋副会長につきましては、オブザーバーとして御出席いただきまして、必要に応じ、事後活動組織とその活動につきましても御質問等があった場合に、お答えいただくことになっております。よろしくお願ひいたします。

それでは、議事を進めさせていただきます。まず、事務局から配布資料等につきましても、事務的な説明をお願いいたします。

久津摩参事官 本日はヒアリングの後、意見交換ということですが、簡単に資料について説明させていただきます。

まず、資料1として、議事要旨が入っていると思っております。こちらにつきましては、座長の御了解をいただきまして、既に公表をしております。

資料2の議事概要につきましては、次回の検討会までにご確認いただければと思っております。

資料3～資料5は、効果の測定方法に関する資料です。

資料6は、各事業の特質などについて、改めて整理したものです。

これらにつきましては、後ほど意見交換の前に詳しく御説明をさせていただきたいと思っております。

以上でございます。

牟田座長 ありがとうございます。

次に、本日、赤尾委員がやむを得ない事情のため、冒頭の30分みの御出席ということですので、まず最初に赤尾委員から前回の各委員の御意見なども踏まえまして、御意見がございましたらお伺いしたいと思います。

赤尾委員 前回の補足方々という感じになってしまいますが、本日の資料に基づくコメントがありましたら、またメールで差し上げます。

この前、言いたくて言えなかったことの1つは、中国や韓国との関係です。私は前に日本アセアンセンターの事務総長をやっていたときも同じ問題がありました。日本が20～30年前に、これは非常にいいアイデアだということで他国に先駆けて開始して、成果が上がって、東南アジアなど諸外国に非常に評価された事業があります。その結果、これら諸国から中国や韓国に対して是非とも同じようにやってほしいとの要求、圧力があって、やっと今度は中国や韓国が実施しだしたときになると、日本ではこういう組織や計画は廃止せよとか、予算をばさばさ削るとかいうことになって、非常に困ったことがありました。

それを何とか巻き返しを図って維持できたことがあるのですが、まさに内閣府の青年国際交流事業も同じような状況だと思います。やはり過去にこれは非常にメリットがあると、特に青少年交流が重要だという判断で開始して、関係国から高い評価を得て、それを見た韓国や中国もそういう気になって始めているときに、日本が突然やめていくとか事業規模を縮小しろというのは、まさに逆行ではないかという気がいたしますので、この辺りは非常に重要なポイントとしてお使いいただけるかなという気がいたします。

あと、特に新しいことはありませんけれども、この前も出ておりましたが、いろいろとフォローアップをやっておられるということですが、私も1か月とか2週間とかの事業をやりっぱなしで、それで終わりということではなくて、これをフォローアップしていくことは非常に重要だと思います。勿論それを認識された上でやっておられるわけですが、例えば持ち回りで年次総会を各国でやっているという話を伺いましたが、どなたが日本から出席しておられるか知りませんが、このような総会には大臣は難しいにしても、できれば副大臣とか政務官に出させていただいて、できるだけ皆さんと懇談をしていただくとか、交流をしていただけるようなことをやっていただくと、非常にいいかなという気がいたします。

私はタイに大使として駐在しておりましたときに、たまたま青年の船に乗った日本人が現地に住んでいて、彼がタイの元教育大臣などで船に乗った、偉くなっている方と知り合

っていて、話し合っ、元青年の船経験者の間でゴルフ大会をやるうということになりました。ゴルフをできない方は夕方の懇談会だけ出てほしいというので、100 人近くの方が出て、ゴルフ場を貸切でやったことがありました。勿論、ゴルフができない方は夕方の懇談会に来られてました。年次総会とは別に現地ベースで、例えば東京からの出張とまではいなくても、現地の日本大使館の協力を得るなどして、そのような交流をできるだけ支援していくということもいいかなという気がいたします。

今、大臣から御説明がありました、民間との連携。例えば日本の企業活動は、特に最近では円高もあって、80 年代以来円高が進んでいますけれども、どんどん海外に進出しています。このような民間企業にとっては現地の人たちの心情がよくわかるような職員の養成が非常に重要だと思います。ですから、例えば東南アジアに進出しておられる企業と連携して、将来この地域に派遣しようというような若手職員できるだけ推薦してもらって、企業側の費用負担で参加していただくということで、人数を増やすなり、政府の経費を減らすなりするのも一案ではないかという気がいたします。

牟田座長 赤尾委員、どうもありがとうございました。本日は新しい資料も配布しておりますので、これにつきまして、先ほどのお話のように、是非御覧いただきまして、また電子メール等で御意見をお寄せいただければ、ありがたいと思います。

それでは、続きまして、駐日タイ王国大使館のパタラット・ホントング公使参事官からヒアリングを行いたいと思います。同氏は東南アジア青年の船事業に 25 年前、1987 年に参加をされました。その後、タイ王国の外務省に入省され、今年の 6 月から駐日タイ王国大使館に勤務しておられます。本日は外国人の既参加青年として、また外国政府の一職員として見た事業の意義や評価について、御意見を伺いたいと思います。

では、パタラット・ホントング公使参事官から 10 分程度で説明をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

パタラット公使参事官 今日はこの会議に呼んでいただきまして、大変ありがとうございます。日本語で説明ができなくて大変申し訳ないんですけども、今日は英語で説明させていただきます。

自己紹介いたしますと、私の名前はパタラット・ホントングと申します。1987 年、25 年前に東南アジア青年の船に参加いたしました。現在はタイ大使館の公使参事官として日本で勤務しております。今年の 4 月には、事業参加 25 周年を祝う同窓会を行うことができました。現在も 25 年前に築いたネットワークを続けております。

この東南アジア青年の船は、もうすぐ 40 周年を迎えるところで、このような評価をするという会に呼んでいただきまして、大変うれしく思います。私の意見がこのような評価のときに、とても有益なものとなりますように期待しております。

まず最初に、東南アジア青年の船で私が何を得たかを共有させていただきたいと思ます。東南アジア青年の船への参加は、私に最も影響を与えた経験であり、非常に意義のあるものでありました。今、私がこのように外交官になったのも、東南アジア青年の船に参

加したからであり、その後、20年くらい働いてきたすべての原点は、東南アジアの船にあります。それがなぜかということの説明させていただきます。

まず最初に、国際的な友好について、東南アジア青年の船に学んだからです。私が参加したときには、東南アジアは5か国でしたが、5か国と日本ということで、各国の人々、また文化の類似点と相違点を学ぶことができました。また、それに加え、自分の国についても学ぶことができました。

2か月のプログラムの中で、互いの相違点を認め合うことができ、相互理解することができ、私の国際的視野を深めることにもつながりましたし、興味を広げることにもつながりました。

2つ目に、自国について知ることができました。私が参加したときには、まだ大学生でしたので、そこまで深くいろいろなことについて考えておりませんでした。しかし、東南アジア青年の船に参加したときには、私がタイを紹介する大使になったと思いました。プログラムの中で自国を紹介するという場面がたくさんありましたので、自国の伝統的な文化というものを振り返る機会となりました。

船上のプログラムの中で、自分の国を紹介したり伝統文化などを披露するプログラムがあったり、各国でのホームステイなどを通じて、自分の国のこと、人のこと、文化のことをほかの人に説明する機会がたくさんありました。それを通じて、自分の国について、よりよく知ることができました。東南アジア青年の船は、自分の国について、よりよく知る機会でもありました。

また、最も大切なことだと思えますけれども、私自身について知ることにもなりました。東南アジア青年の船で、初めてタイとは違う国に行くことになりました。そこでは、それまでの人生ではなかった、初めて見るもの、初めて聞くことがたくさんありました。そういうことを通じて、自分の心や精神、自分の能力を知り、また、様々な分野に関する知識を得ることができました。その知識というのは、ASEANの国々、日本についての知識であったり、または言語力やコミュニケーションスキル、そのようなものになります。そこで初めて、東南アジア地域の問題であったり、国際的な問題ということを知る機会となりました。

このような3つのポイントがあったために、東南アジア青年の船の後、外交官となって活躍しようとして心に決めました。ですので、今、振り返りましても、東南アジア青年の船によって、現在の私があると言っても過言ではありません。このため、東南アジア青年の船は、とても影響力があって、とても特別で、とても意義のある事業だったと言えます。

次に、東南アジア青年の船がタイ国で、また、自分の中でどのように評価しているかということをお伝えしたいと思います。

タイでは、公的なところでも私的なところでも、東南アジア青年の船がとてもユニークで、とても特別で、価値のある、地域的な交流プログラムであると認識されております。

なぜそれがユニークかというところですが、それが東南アジアという地域と日本という地域を対象に行っており、それが日本に来てのプログラムだけではなく、ほかの東南アジアの国々も回っていく。ASEAN と日本という地域的なプログラムであるということがとてもユニークだと思います。また、そのプログラムを通して、類似点や相違点などを学ぶことができるということも、青年間の友好が深められるところも、とてもユニークだと認識しております。

次に、なぜこれが特別かということですが、このプログラムを受けるためのテストを受け、それに通過するのをとても楽しみにしている若者がたくさんおります。それはなぜかと言いますと、このプログラムに参加することによって、ASEAN と日本の友好、友だちをつくることができ、海外を見ることができるといった特別なプログラムだからです。

なぜこれが価値のある事業かと言いますと、事業としてしっかり成り立っておりまして、それがまた日本・ASEAN 各国においてしっかりとコーディネートされている、非常にうまく組織化されているプログラムだからです。また、日本をリーダーとして、ASEAN 各国を含め、プログラムが成り立っているところがとても価値があると考えております。

タイ国政府としましては、この事業はとても有名であり、そして、とても意義のあるものだと考えております。このような地域間のプログラムが 40 年も続いているというのは、とても素晴らしいことでありまして、それが 40 年経った今でもその将来が見える、続けることの意義が見えるということも大変素晴らしいととらえております。

このプログラムを通して何がいいかというと、人と人とのつながり・ネットワークを築くことができるところでございます。それによってパートナーとなって、いろいろなことを共有していけるところが大変素晴らしいと考えております。

今、私どもが考えておりますのは、人と人との交流のネットワークというのは、一番大切だと考えております。それも ASEAN だけではなくて、ASEAN と日本というつながりの中で考えたときの人と人との交流が大変大切だと思っております。

このプログラムのほかにも J E N E S Y S (外務省が行っている 21 世紀東アジア青少年大交流計画) でしたり、そのほかの ASEAN 地域での交流事業もありますけれども、この「東南アジア青年の船」というのは、そのようなさまざまな国際交流事業の基礎となっている大変よい事業だと考えております。また、今後、例えば簡単な小さいプログラムをつくるにしても、東南アジア青年の船事業を参考にしながら、さまざまな日本と ASEAN との協力体制の下、プログラムをつくることのできるベースとなるものでありますし、この東南アジア青年の船というプログラム自体は、今後も未来が見えるプログラムであると考えております。

これがなぜそうかと言いますと、過去、自分の経験に基づきまして、また、40 年続いているという事実もかんがみましても、人と人との本当のつながり・ネットワーク・友好が築けるのがこの事業であると確信しているからです。その友好がただ続くだけではなくて、それが更に広がっていく。また、船に参加した人だけではなくて、周りに関係している人へとどんどん広がっていく友好であることを自分の経験からも体験したからです。

このネットワークと友好というものがどのように広がったかという例を一つ紹介すると、自分の同期やタイの既参加青年とともに、タイの恵まれない子どもたちへの支援プログラムや、ほかの国への支援という形で、各自がプログラムを事後活動というような形でしております。これがどうしてできるかという、東南アジア青年の船事業自体が、地域のネットワークや友好が大変強く結ばれるものですので、そうして築かれた絆がその後のプログラムにまで発展して、地域への貢献につながっています。つまり、強固に築かれたネットワークを土台として、様々な活動が行われ、社会貢献として還元されているということが、特徴として説明されると思います。

ありがとうございました。（拍手）

牟田座長

それでは、ただいまの御説明につきまして、御質問、御意見等がありましたら、どうぞ御自由に御発言をいただきたいと思います。

私の方から1つよろしゅうございませうか。25年前、この東南アジア青年の船に参加をされたわけですけれども、どのような事情でこういう事業があるというのをご存じになったのか。そして、どうしてこれに参加しようと思われたのかということがまず1点。

それから、船に乗っているいろいろな方とお話をされて、視野が広まったというお話でございましたけれども、特に日本に対して、船に乗る前と乗った後で、日本に対する知識とか対日観というものがどういうふうにお変わりになったかをお聞かせいただければ、ありがたいと思います。

パタラット公使参事官 御質問をありがとうございます。新聞を通して、東南アジア青年の船について、小さいころに知りました。この事業は学生の中でとても有名な事業となっています。いつか絶対に参加したいと思っておりました。

日本の大使館が新聞広告を行っているのを見つけまして、それがちょうど大学3年生のころでした。それに参加しようと思ったんですけれども、応募者が大変多くて、とても大変なプロセスを経ていることを認識しました。

学生にとっては夢のようなプログラムで、これに参加することによって、船に乗っているいろいろな国に行って、いろいろな国の人と友だちになってというのは、大変魅力的なプログラムで、たくさんの方が行きたいと思っているプログラムでした。

自分が参加したいと思った当時は、自分は日本についてもASEANについても余り知らなかったもので、名前くらいしか聞いたことがなかったので、どういうふうなことが起こるのだろうと期待をしておりました。

その時期ですけれども、ASEANは5か国しかなくて、あと日本ということで6か国だったんですが、タイと日本の関係もその時期は余りよくない時期でしたので、各国について余り知らなかったという状況がありました。

自分にとっては新しい世界を開く2か月間となりました。2か月間ありましたので、少しずつお互いのことを知っていくことができました。その前には日本とタイに似ているところはないだろうなと思っていたのですけれども、参加したことによって、タイと日本の

似ているところもわかりましたし、ASEAN 各国の中でも似ているところがあるんだなと感じました。

東南アジア青年の船に参加し終わった後に、もっと知りたいと思いましたので、東南アジアや日本についての授業を取るようになりました。さらにその関係について知りたいと思い、いろいろと授業を取りました。そのときにはもう外務省に入ろうと思っていたのですが、もっと日本が知りたいと思いましたので、文部省の奨学金のテストも受けました。

私にとっては、東南アジア青年の船事業に参加したことによって、日本についての情報が、日本青年を通したものであり、ニュースとかのものではなかったもので、人を通した日本の社会を見ることができました。特にその時期がタイと日本の関係があまりよろしくない時期だったので、その人と人との交流、心の友好から国を理解することができ、留学を通して、更に日本について深く知ることができました。

2か月という大変十分な時間がありますので、日本やASEANの他の国などをそれぞれ比べることができたところが、私にとっては大変よかったです。また、それが例えば1か月とか10日とかという短い時間ですと、そこまでよく知ることができませんでしたし、こういう2か月というちゃんとした期間があるところがとてもユニークで、他に抜きんでて特別なものだとは私は思っております。

田中委員 今の御説明をいただいて、前回、中川大臣から、民間と国がやるものとの違いとか特徴をはっきりさせてほしいという意見があったんですけども、今の話を伺うと、民間か政府がやるかという以前に、やはり40年の中で1つのブランドをつくられていて、そこでのエスタブリッシュされたものというのは、ほかに類がないだろうということで、一つ答えが出されている気がします。

その上での質問ですけども、船に乗るということに関する特徴とかユニークなところ。ほかにも交流事業はいろいろあると思いますが、あえてこれは「船」という手段を選んでいますが、その船の特徴について、もし御意見があれば、いただきたいです。

パタラット公使参事官 寄港地での活動中ではない、事業の半分以上の時間船の上に乗っています。船の上という限られた場所になっていますし、船に乗っているということは、どこにもほかに逃げ場がないということでもありますので、そこでたくさんの人と仲よくなって、そこでだれかとともに一緒に話をして、一緒に何かをやっていくというところが大変ユニークなところでもあります。常に誰かと一緒にいざるを得ない環境とも言えます。

事業の中でも幾つかのグループ分けがありますので、そのプログラムを通して、ほかの人を知り、更に一緒に何かをつくり出すことができます。寄港地に行ったときですけども、参加青年という一まとまりで行きますので、自分がシンガポール人であったりとか、タイ人というよりも、「東南アジア青年の船」の参加青年というカテゴリーといいますが、コミュニティといいますが、そういうところがとても意識の中に出てくるところがポイントであると思います。

塚田委員 パタラット公使参事官に私も1つお伺いしたいと思います。今のお話は大変役に立ったのですが、パタラット公使参事官が今から20年以上前、30年くらい前に青年の船に対して感じた強いあこがれとか魅力、参加した充実感、それと同じような気持ちを今の若いタイの参加希望者が持っておられるのでしょうか。日本も随分変わったけれども、タイも随分発展をされて、ASEANの中でも主導的な国になっておられますが、この船に乗ろうというタイの若者たちは、当時のパタラット公使参事官が持たれたような情熱とか、憧れとか、そういう気持ちを同じくらいお持ちでしょうか。

パタラット公使参事官 確かに日本とASEANでの交流プログラムは大変増えてきましたし、タイも海外に自分でも行けるような時代になってきましたし、やはりタイの青年の選択の幅が広がったということは事実ですが、この東南アジア青年の船が今でも青年にとっての夢であり、そして交流プログラムとして最高の事業という認識は変わらないと私は思っています。

なぜかといいますと、船のプログラムが大変ユニークでありまして、それがただ一つしかない。そして、そこで一緒にほかの11か国の人と一緒に時間を過ごせるというのが、とてもユニークで大変いいとタイの若者も認識しているからであります。また、このプログラムというのは、自分の国を象徴する人になるというアンバサダーというところもありますので、そこも大変地域感ということでユニークだと感じているからです。

青年ですけれども、このプログラムに参加するには大変難しいテストをくぐり抜けなければいけません。それも3段階になっておりまして、記述テスト、インタビュー、後は何かしら伝統的なものを披露しないといけません。そういうタイの文化を披露する能力がないと思う青年は、若干ほかのプログラムに行ってしまうところもありますが、政府としても、このプログラムの参加青年をよりよい人を集めるというところで、毎年工夫をしてテストも行っております。

塚田委員 大変元気づけられました。ありがとうございました。

鳶委員 このプログラムが今、日本の国内の仕分け作業中では、やめようではないかという話があるわけですが、そのことをお聞きになったときに、どういう印象を持たれたのかということと、今のお話を聞いていると、この船に乗ったことによって、奨学金で日本の大学へ留学し、なおかつ今は大使館に勤めているわけですが、この船に乗ったことが自分のその後の職業とか、あるいは生き方の動機づけとして、非常に大きな意味を持っていたのかどうか。あなたの場合だけではなくて、そのほかの人にも大きな意味を持っているという話をよくお聞きになるかどうか。その点についてお聞きしたいと思います。

パタラット公使参事官 東南アジア青年の船事業が終わるということは、とても残念に思います。この事業はとてもユニークで、ほかのプログラムと違います。日本で新しいプログラムができてきていますけれども、それともやはり違うと私は思っていますので、これを廃止するというのは大変残念だと思います。

また、更になぜ残念かと言いますと、現在、国際社会の中では、しっかりとした人と人とのつながりを大変大切に、重視しているところだからです。ほかに新しくできているプログラムもありますけれども、このプログラムはもう既に完成されていて、このプログラムがずっと続いてきているということは、人と人とのつながりがかなり確実にでき上がっているということが一つのポイントとして挙げられます。

今、特に ASEAN と日本という枠組みで協力体制を築こうとしていますけれども、この事業は、ASEAN が 5 か国でまだ少ないときから日本が始めて、10 か国になって更に増えていっても続けている事業です。日本・ASEAN の協力関係の中で、この東南アジア青年の船を 1 つの公式プログラムのような形にすることによって、例えばこのプログラムが将来 100 年続いていけば、歴史のある日本がリードしてやってきたプログラムとして胸を張れる。日本が世界に胸を張れるプログラムになると思いますし、特にこのプログラムというのが実際の人と人とのつながりを実際につくれているプログラムであるので、それをなくすというのは大変残念なことだと考えております。

2 つ目の質問に対してですけれども、船に乗ることが将来の生き方にどういうふうに関わっているのかということなのです。1987 年当時は、私のようにその前に海外旅行に行ったことがなかった人もたくさんいましたので、そういう人にとっても大変影響を与えたプログラムであると思います。その内容としましては、社会に貢献しようという気持ちであったり、責任感とか、あとはほかの国の人と一緒に共働するところが、それをスキルとして自分の中に持っておりますので、私のように例えば外交官という形になっていなくても、それぞれの分野でそれぞれの場面で、そのスキルを使って、その場面で貢献している既参加青年はたくさんいると考えます。

この経験を通してネットワークというものが十分に形成をされていますし、またこれが各国に事後活動組織を持っていますので、それを通して、例えばその地域での新しいパワーとなって、将来の共同事業というのもつくり出せますし、このネットワークというのが大変重要であると考えております。

牟田座長 どうもありがとうございました。まだ御質問があるかと思いますが、時間も限られておりますので、次の議題に移らせていただきたいと思います。

パタラット・ホントング公使参事官、本日は大変いいお話をありがとうございました。

パタラット公使参事官 今日はこのような形で私の考えを説明させていただきまして、ありがとうございました。

(パタラット・ホントング公使参事官退室)

牟田座長 それでは、次に意見交換に入ります前に、事務局から若干説明がございます。

それでは、久津摩参事官、よろしく願いいたします。

久津摩参事官 それでは、資料 3 以下につきまして、若干御説明をさせていただきたいと思っております。

資料 3 ~ 5 についてですが、これは効果の測定方法に関するものでございます。こちらの検討会は効果測定と評価に関する検討会でございますけれども、その中で測定方法につ

いては、若干難しい問題もあるかと思えます。また、それをできましたら7月中に中間報告という形でまとめていただきたいと思いますので、その中で測定方法に関する部分について、議論の整理などをさせていただいたということでございます。

まず資料3ですが、前回の議論を踏まえまして、効果の測定方法について、整理の方向の案を、こちらに1～5までまとめさせていただきました。

1つは、対象は青年国際交流事業全般であり、船事業を始め、各事業ごとの効果の違いについても考察するという事です。

次に、目的に照らして、体系的に整理して示すべきというお話でした。

3点目は、定量化すべきものは定量化し、困難なものは定性的な形で、できる限り明らかにしていくということです。

既存のデータからわかることを整理するとともに、必要であれば、可能な範囲で緊急的な調査を行い、客観的なデータを整備する。これにつきましては、資料5に新しい調査につきまして、案を示させていただいております。

5番目といたしまして、短期的、中長期的な観点に分けて効果測定を実施すべきということでした。中長期的な課題については、今後の課題として指摘することについて検討するという事であったかと思えます。

資料5のアンケートについてですが、内閣府の事業の効果を図るため、内閣府の事業と留学を両方経験されている方がいれますので、その両方の経験を比較して、どのような効果が得られたかということについて聞くということが考えられるのではないかという提案をいただき、考えた次第でございます。

期間は7月中で行いたいと考えたいと思えます。こちらにつきましては、皆様からの御意見も伺いまして、その後で具体的に実施内容とかは考えてまいりたいと考えております。

前後しましたけれども、資料4としまして、事業により期待される効果とその測定方法につきまして、全体像をまとめさせていただいております。こちらにつきましては、前回の御議論で体系的に整理すべきだというお話がございまして、田中委員の方からもそれに関しまして、後ほどまとめ方の提案ををいただきまして、それを踏まえてつくらせていただいたというものです。

大項目としては3つ挙げられるということで、外交的效果と人材育成と国際ネットワーク。この3つにまとめられると考えております。

外交的效果につきましては中項目としまして、事業を実施することによります国と国との関係、友好親善を推進する機能というものがまずあります。それぞれ小項目、定量的なものとか定性的なものとか、いろいろなものがありまして、それにつきましては根拠資料やデータもあるわけです。こういったものをまとめていくということになるかと思えます。右端に「検討の方向(案)」とございますけれども、こちらに書いてありますような方法でまとめていくことになるのではないかと考えております。

国と国との関係につきましては、いろいろな首脳会談に基づいて始められたハイレベルなものであるといったことにつきましては、いろいろと根拠もございますが、こちらにつきましては定性的に評価をしていただくしかないのではなかろうかと思っております。

事業によります日本のイメージ向上につきましては、報道記録などにつきましては定量的に測定することがある程度可能ではなかろうかと考えております。

その後の交流、民間外交ということで下の方に書かせていただいておりますけれども、こちらにつきましては、事後活動組織ができておることとか、そういったいろいろな活動に参加している数とか組織率とか、そういうものにつきましては定量化できるものもございますし、親日家が形成されたとか、こういうものにつきましては事後のアンケート調査の結果がございますので、本人が答えているということはございますけれども、そういったもので一定の定量化はできるかと思っております。ただ、それ以外につきましては、定性的に判断、評価していくしかないのかなと思っております。

次の人材育成につきましても、本人の評価、事業終了後のアンケートとか既参加者のアンケートとかがございますけれども、そういったものについては数量化は一応できるとされているものでございます。

事後活動組織の活動数とか規模とか活動の量とか、そういったものについては定量的なものとしてあるのかなとは思っております。そのほかにつきましては、指導官などによります評価とか、本人によります記述された内容とか、そういったものもあろうかと考えております。

事後活動、その後の社会貢献活動につきましては、実施しました内容につきましては定性的に評価していただくしかないのかなと考えております。そういったことで一部定量的なものもございますし、定性的に評価していただくものもあるということかと思えます。

この中で、先ほど申し上げましたとおり、留学の経験と比較しての新たな調査をやるということも新たに考えたいということで、資料5の調査を行いたいと考えているところでございます。

活動の実績につきましては真ん中辺りに記しておりますけれども、量的に一定期間、例えば1年間にどれだけの量を活動したかというようなことで、客観的な形で示すということを考えております。資料がIYEOの方には刊行物として、これまでの活動実績がたまっておりますけれども、そういうものを量化することを考えたいということでございます。

その後の青年たちの活躍ということで、どういう職業に就かれて活躍されているかということについては、厳密な比較分析は困難ですけれども、ある程度の比較は試みることが考えられるのではないかとということで記しております。

国際ネットワークにつきましても、事後活動組織への参加率とか加入人数とか、活動の回数とか規模とか、そういったものにつきまして定量化しまして、後はいろいろと活動内容につきましても定性的にまとめてまいりたいと考えております。

資料3～資料5までが測定方法に関するものでございます。

それから、後ろの方に各事業の効果についてということで付けておりますけれども、こちらについては先ほども資料4の方が事業全体について書いておりましたので、各事業について整理すると、どういうことが考えられるかということでまとめたものが、後ろに付けた資料でございます。各事業は特色がございますので、こちらにつきまして御説明をしたいと思います。

資料6の方にまとめておりますので、そちらに基づいて御説明をいたしたいと思います。

吉田補佐 私の方から資料6に基づきまして、内閣府青年国際交流事業は今まで6つの事業があるという話をさせていただきましたけれども、それぞれどういうことを目指しているのかについて、また、それぞれの事業で今後見直しですとか、いろいろな議論を行う中で、それぞれの特徴をきちんと押さえておく必要があると思いますので、それについて少々5分程度、細かく説明をさせていただきたいと思います。

資料6の1枚目、6事業に共通する考え方ということで、どういうことを目指しているかというのは前回もお話しさせていただきました。

まず1つは、外交的な効果として、相手国との間での関係をつくる。自国の理解者を得て、民間レベルでの友好関係をつくる。また、参加者青年が大使館と連携して、外交活動に役立つような人的なつながりを形成するののも一つの目標ではあると考えております。

2点目、日本人参加者の人財育成です。こうした日本人が国際交流を行うことによって、特に長い期間を行うことによって、いろいろな効果が人財育成上あると思っております。1つはリーダーシップを發揮できる、外国青年とのディスカッションなどの中で、やはり主体的、能動的に積極的に動いていこうと。また、すべての自主的な活動の中で、そうした主体性を培っていこうと考えておまして、一言でいえばリーダーシップを發揮できる人材。

それは例えば組織でリーダーシップを發揮して、国際的な場面で活躍できる人材でもそうですし、そういった国際的な場面に出なくても、国際的な視野を持って地域で地域活性化に貢献できる人材もいようかと思えます。

例えば今、陸前高田の副市長がおりまして、彼は事業に参加した経験もありまして、今どういうことを行っているかと結構いろいろな各国からの支援をもらっておりますけれども、そういう国際的な支援の窓口として協力したり、そういった必ずしも世界の国際的な場面に出ていなくても、そういった国際的なつながり、国際感覚を持って地域活性化ですとか、今は復興支援ですけれども、力を尽くしているというようなものもおります。

また、国際機関などで活躍できる人材ですとか、もしくはASEANとの関係であれば、ASEANについての専門家が出てきたり、あとはラテンアメリカについての専門家が出てきたりしております。

3点目、外国人参加者の人財育成です。同じように外国人参加者もそういった国際的な交流活動を通じて能力が磨かれたり、国際感覚の視野が広がったりしますので、そうした人材を育成するというのが、まさに日本ができる国際貢献ではないかと考えております。

4 点目、日本への外国青年招へいプログラムです。外国青年を招へいする中で、参加青年だけではなくて、日本のいろいろな方が国際交流に携わる機会が得られると考えております。

5 点目が訪問国における効果ということで、日本から外国に訪問することによって、日本人の考え方、日本文化をより多くの外国の方に知っていただくことができるということが期待されます。

こうした我々の事業は外交的にも重要な事業でもありまして、特に東南アジア青年の船は皇室との関係がある事業などもありますので、内閣総理大臣の直轄の下で行うことが適当であるという考えが従来でありますということと、こうした外交的な側面だけではなくて、日本青年をいかに育成するか。

また、それは事業に参加して育成するだけではなくて、事業に参加した後のネットワークを使いながら、どう活躍を図っていくか。活動を活発化させていくかということで、都道府県等の青少年担当部局とも連携することが大事ですので、そうした青少年政策との関係、外交的な関係というのもありまして、内閣府が所管して事業を行っております。

次のページです。各事業の特色ということで、前回、プログラムの具体的な各事業、どういうプログラムかというのは資料の方で付けさせていただきました。東南アジア青年の船、日中、日韓につきましても、外交上重要な事業ということで、特に外交的な側面があると考えております。

どういう側面かといいますと、例えば東南アジア青年の船であれば、日本と ASEAN10 か国とが共同事業として実施している。日本と ASEAN10 か国の政府が来年もこれをこういうふうに評価して続けていきたいと思いますとか、そういうことを毎年話し合いながら事業を行うとともに、必要な経費を相互に負担しながら行っております。

東南アジア青年の船であれば、先ほどの参事官の話でもありましたけれども、日本と ASEAN の青年が連帯感を持つ。生涯にわたる質の高い人と人とのつながりをつくるということを目指しています。そうしたことを目指して実際に行っている事業も 43 日間の航海を行っておりますけれども、そのときに日本と 5 か国で訪問国での活動を行っております。その中で必ずホームステイを入れまして、各国の生活文化、各国の人との交流を深める機会を提供することに重きを置いています。

世界青年の船についてですけれども、交流対象国は日本側が選定しておりまして、毎年日本側で選んでおります。特に世界青年の船の場合は、世界 10 か国ないしは 12 か国から、例えばイスラム圏の国もありますし、ラテン系の国もありますし、世界のいろいろな異なる文化、価値観を船内に持ち込んで、まさに一つの小さな世界をつくる。その中で異なる文化、価値観のぶつかりの中で、いろいろな価値観を身に付けたりとか、そういった価値観を多国間、多文化の中に対応できる人間を育てるということに力を使っております。

特に世界青年の船の場合は、船の中での交流の時間がほとんど占めますので、そうした中で自主性を発揮する。それが将来の組織や地域でのリーダーシップを発揮できる人材育成につながると考えています。

国際青年育成交流は日中、日韓と同じで、飛行機で相手国に派遣するというものですが、国際青年育成交流は日本側が選定して、特に12人という人数で行きますので、相手国で滞在期間中、常に日本側の代表青年、日本人とはこういう人だと見られる、まさに日本の代表者として見られることになります。そうした経験を通じて、一人ひとりが小さな組織の中できちんと自主性を発揮して活動できる。組織の中で調整型ではなくて、一人の人間として独り立ちをして活躍できる人を育てることに力を置いています。

青年社会活動コアリーダー育成プログラムは、青少年、高齢者、障害者の3分野の非営利セクターの中核人材を育成する。こうした人材は非営利セクターがまず大事。また、こうした青少年、高齢者、障害者については、行政だけがやるのではなくて、まさに非営利セクターと役所との連携。特に非営利セクターがまさに今の社会の中で、どんどん力を持って、よりきめ細かなサービスを提供できる。そうした非営利セクターをきちんとマネジメントできる中核的な人材を育てることに主眼を置いています。

また、そうした方々がこういった国際交流に携わって、幅広い視野を持ったり、新たなサービスを考える。また、団体運営能力を向上させるということも大事ですし、こうした既にそれぞれの地域で仕事を持って活躍されている方が国際交流に携わることによって、その後も地域社会の担い手としても活躍してくれるということで、まさにすぐに地域で活躍してくれる地域リーダーをすぐに育てることができると考えております。

そうした事業の特色を我々はプログラムで反映させるために、こういう考え方を持って行っております。例えば東南アジア青年の船であれば、そういった連帯意識をきちんとつくるということで、これは3番目につくっておりますけれども、船内での共同生活、特に3人1部屋ですとか、先ほど参事官のお話にもありましたが、いろいろなグループをつかって、11か国が集まって基本的な生活グループをつかって、そこが特に濃密な人間関係をつくるという、いろいろな組み合わせで人と人とが会う機会をつくるようにしています。

また、ディスカッションやプレゼンテーションの能力の向上は、国際的な場面での活躍に重要なこともありますので、船内でのディスカッション、日本に来たときの地方でのディスカッション、自国の文化を各国に発信するための機会。そういった機会を設けるようにしております。

そういったことを通じて、日本とASEANの各国事情を学んだり、(4)ですけれども、各国の生活文化や国民と直に触れる時間をきちんとつくるということで、日本とASEANという連帯感をつくる。これはASEANだけではなくて、日本とASEANという11か国での連帯感をつくるということが非常に重要だと考えています。

4ページ、世界青年の船です。これにつきましては、よりディスカッションやプレゼンテーションの向上ですとか、船内でのディスカッションに力を入れています。東南アジア青年の船もそうですけれども、専門知識を持つようなアドバイザーの下で、きちんと青年がディスカッションをします。また、青年の社会参加を大きなテーマとして、教育とか文化とか、いろいろなコースに分けてディスカッションを行っておりますけれども、こうし

たことを行うことによって、青年が自分たちは何ができるのだろうか。自分たちは社会に
どういうことを貢献できるのだろうかということを考える機会をつくるようにしています。

自主性ということで、同じように各国青年との連帯意識のための、育成のためのいろ
んな工夫も行っていきますけれども、「(4)青年のリーダーシップの育成」ということで、
世界青年の船の場合は、東南アジア青年の船に比べて、船内で自主的な活動やクラブ活動、
PY セミナーというのは参加青年が企画して、ほかの人にセミナーをするというものです
けれども、その他リーダーシップセミナーをつくりまして、船の中で自分は何をやりたいか
という目標を設定する。中間的にそれはどこまでできているかを振り返る。更にその後、
船で学んだことを事業の後、どういうことを個人としてやりたいか、みんなとやりたいか
という行動計画をつくる。そういうリーダーとして成長するプロセスも世界青年の船では
重視しています。

国際青年育成交流事業につきましては、日中、日韓は国際青年育成交流事業の中国版、
韓国版に近いところもありますので、少し割愛しておりますけれども、国際青年育成交流
事業につきましては、一対一の国と国との関係での交流ですので、やはり訪問国につい
ての理解を得ることに力を入れております。そのために相手方の大統領や大臣への表敬訪問
に加えて、大使館を訪問していろいろな説明を受けたり、課題別視察を行ったり、ホーム
ステイを通して、人と人との交流を行ったりということに力を入れております。

青年社会活動コアリーダー育成プログラムにつきましては、これは専門分野の知識向上、
青少年、高齢者、障害者という専門分野を持った人を派遣しますので、その分野での知識
の向上と、特に選んでいるのは先進国で市民活動が盛んな国。例えばニュージーランド、
イギリス、ドイツ、デンマークなどとの交流を最近行っておりますけれども、そうした
ところでの NPO、NGO の確立されたマネジメントのノウハウですとか、そういうことも学んで
もらおうと考えています。

そのためにいろいろなディスカッションを行ったりですとか、施設や団体を訪問する
んですけれども、そのときに単に訪問して、いろいろと話を聞くだけではなくて、三時間
とか時間を取りまして、きちんと通訳も付けて、意見交換をしっかりと行う。そうした
ことを通じて、能力を高めてもらおうと考えています。

単にそういった現場だけではなくて、いろいろな観点から学べるように相手国政府や相
手の地方政府からきちんとレクチャーを受けたり、意見交換を行ったり、その国の事情に
ついての大使館からの説明を受けたりということを行っております。

我々は6つ事業がありますけれども、それぞれの特徴に応じて、限られた日程の中でい
かに効率的に、または効果的な事業を行えるかということで、その事業のねらいをきちん
と定めまして、それぞれに対応したプログラムはどういうことが必要なのだろうかとい
うことで考えております。

そうした結果が前回の資料の5に付けさせていただいて、こちらの資料の10番になり
ます。こうしたそれぞれの事業でねらっている目的、東南アジア青年の船であれば連帯感、
世界青年の船であればリーダーシップと国際的な調整能力。また、コアリーダーであれば

専門性と団体運営能力。育成交流であれば、それぞれの国についての知識やその国についての幅広い観点からの知識と、その国とのまさに友好の懸け橋となるための必要な人的なネットワークづくり。

そうしたものをきちんと行ってもらえるようなプログラムをつくるために、資料の10番にいろいろと書いておりますけれども、その日にちの中で多めに詰め込んで、プログラムを行っております。

以上がプログラムの特徴で、そうしたプログラムの結果、得られているいろいろな効果を、今までのものを整理したものが別途配らせていただいた、青年国際交流事業の各事業の効果についてという資料になっております。

長くなりましたけれども、こうしたことを考えているということと、あとは事業に参加した後の事後活動にきちんと移っていくようなプロセスを重んじているということをお理解いただければと思います。

以上です。

牟田座長 どうもありがとうございました。

皆様方との意見交換を行います前に、ただいまの御説明につきまして、何か質問等ございますか。よろしゅうございましょうか。

それでは、時間の関係もございまして、前回の御意見、本日のヒアリング、今、いただきました御説明に基づきまして、委員の方々から御自由に御意見をいただければと思います。

嵐委員、どうぞ。

嵐委員 要するに、今の内閣府の説明の仕方は、非常に一般的ですね。これでは、多分聞いている人の心を打たないだろうと思いますね。大体5分で説明すると言っていて、15分かかっているわけです。だから、限られた時間の中で相手に何をきちんと訴えるかということをもっと精査しないと、次の仕分けの時もだめなのではないかと思います。

もう一つは、抽象的なことが多いんです。日本国内でも、大学だって、高校だって、あるいは民間の企業だってこうしたボランティア活動をやっているわけですよ。そういうものどどこがどう違うのかと。ここだけしかない特色をまとめて言うべき必要があるということが1つです。

それから、ほかの国もこういうことをやっているのか、やっていないのか。ほかの国が全然やっていなくて、日本だけがやっているとするれば、それは非常に大きな特色ですね。そういう点も並べて言う必要があるのではないかと思います。リーダーをつくるだとか、共同作業をするだとか、なんていうのは、どこのこういうプログラムでもやっていることなので、そういうことを幾ら言っても、余り聞いている人に訴えかけるものではないと思います。

もう一つ、非常に重要なことは、事業実施の合意のときに、各国首相との共同声明で開始したというわけでしょう。つまり、国と国との首脳同士で話し合っただけのことですね。そのことの意味をもっと強く訴えるべきだと思います。民間だったら、金がなくなったら

やめてもいいとかいろんなことを言えるけれども、これは日本とアジアとの首脳同士の共同声明で決めたり、あるいは政治的にどういう合意なのか知りませんが、日韓、日中間も政治的に決めているわけです。それが一方的に、こちらの金がなくなったからやめますというのでは、相手に対しても失礼だと思います。

こうした首脳同士の合意の意味合いというものをもうちょっときちんと述べた方がいいと思うし、これをやめたくないのであれば、各国の首脳とか各国の担当者、できれば首脳がいいですね。やはりこの世界青年の船の意義は非常に重要なものだから、もっと続けてほしいと。今、タイの公使参事官の方が意義をおっしゃられたけれども、一個人としておっしゃられたわけです。今後は、国の首脳からきちんとしたレターをもらって、こういうことをもっと続けて欲しいということを各国からもらって、その意味合いとも非常に大きくなっていくのではないかと思います。

この間も今回もそうですけれども、青年交流のいわゆる一般的な意義はよく言われているし、それはそのとおりだと思います。そんなこと否定するつもりは全然ないが、それはどこのプログラムだって同じようなことを言うと思うんですよ。ここでやっていることの特色というのは、船であるとか、各国首脳との共同声明の中で実施されていることなんだとか、幾つかほかにはない特色がある。ほかの国でもこういうことをやっていないとすれば、これは日本しかやっていないんだとか、そういうようなことをもうちょっと中心にしてプレイアップすることが大事だという気がします。

多分、この場はこの問題の意義をお互いにたたえ合う会議ではないと思うんです。つまり、内閣府の青年国際交流事業のそれぞれの事業の意味を、どうやったらきちんと訴えられるかという戦略を考えるためにやっているわけでしょう。そしてこの事業を残してもらえるか、そうだったら、そういうことをきちんと考えた上で練るべきだと思います。

畠委員 確かにそれはありましたね。それは非常にいいことだと思います。

久津摩参事官 一部ではございますが、それはやろうと思っております。

あと、外国がやっているかどうかということですが、船は我々日本の特色で1つございます。そのほかに、中国、韓国も、先ほどの赤尾先生のお話にもございましたが、いろんな交流事業を今、進めておまして、それにつきましては、ここの資料には書いていないのですけれども、後日、それはお送りしたいと思います。

畠委員 やっているわけですか。

久津摩参事官 中国、韓国もいろんな交流事業をやっております。

畠委員 船の交流事業をやっているんですか。

久津摩参事官 船はやっておりません。

畠委員 船が特色なんですよ。交流事業は多分、どこの国だってやっているんですよ。同じような交流事業の特色を言ったってインパクトがないと言っているんです。

久津摩参事官 わかりました。済みません。

牟田座長 そのほか、いかがでございましょうか。

田中委員は、枠組みを出していただきましたね。

田中委員 ちゃんと事務局の方々が案を練ってくださったんですけども、鳶委員がおっしゃったこともなるほどと思いながらも、効果の説明が不十分というところなので、そこも対応しなくてはいけなくて、それは全く新しくやるよりは、これだけの材料があるので、整理をし直せば、もう少し見えるところは見えるでしょうというぐらいで説明をしたのですが、今の話を聞いていても、例えばこれだけエスタブリッシュされていて、タイ国では非常に有名なものでハイプロファイルなんだということですね。そういったものが個別のところでは出てこないの、それをどういうふうに出していくのかというのは悩んだところですね。

鳶委員 定量的なものは、効果というのがここにいっぱい書いてありますね。これはもう1枚紙を出して読めばわかるんですよ。そうだな、すごいなと私も思って読んでいましたよ。

ただ、そうではなくて、むしろ説明しにくいところを、例えばタイではすごくこれが意味を持っているということやだれに言ってもらえるのか。それは首脳同士が声明を出しているのだから、首脳からそういう手紙をもらった方がよっぽど一番効果的だと思うんですよ。ASEAN10か国の首脳全員からそういう手紙をもらったらどうですか。

久津摩参事官 そういうことも考えられると思います。

鳶委員 そういうことも考えられるのではなくて、そういうことを実行することが、生き延びる道なんだと私は思いますよ。

牟田座長 塚田委員、どうぞ。

塚田委員 今、お2人の委員から指摘があったことは、それぞれ誠にごもつともだと思っております。私は、実は今日の説明を聞いて、随分広範にわたって資料を再整備して、とにかく基礎的な武器は整えたというぐらいに知識を整理された。

実際に予算要求だとか、査定当局、あるいは仕分け当局と再対峙する機会があるだろうと思うんです。その段階では、当然のことながら、我々が出て行ってやる話ではなくて、内閣府の担当の方が丁々発止やっていたただかなくてはいけない。そのためにはタクティクスもあるでしょうし、このままで全部押し通すとは思っていなかったものですから、そこは十分やっていただけだと思います。

かつ、最終的には、これはとにかく何らかの形で生き延びなくてはいけないわけですから、事業が表面的には変わったとしても、実質において取れるものは取ったということになればいいわけですから、そういうようなことも含めて、我々は知恵を出すと。しかし、内閣府でそれを利用して頑張ってもらおうという理解でいるわけです。そういうことですよ。

牟田座長 今の御意見に関して言えば、確かに先ほどから御異論が出ています鳶委員のように、大使館の方からレターをいただくと。当然そういうことも予算要求については必要なんだろうとは思っています。

ただ、この場合は、要するに評価をしていないではないかということに対して応えようということなので、これとレターをいただくことは別の話で、レターはいただいた方がいいと思うんですよ。できるだけ外交的な圧力を利用して存続を図る。これは当然、今度、財

務省との交渉をされるときに、予算要求をされるときに、当然なさるべきことだと思いますが、ただ、この場としては、やはりこれまで効果の評価をやっていなかったということです。そんなことはありませんと。ちゃんとこういうふうにして、いろんなものがあるって、それをまとめ切れなかったんだけど、まとめてみたらこのようになりますよというところを見せてあげるというのが私どもの役割かなと思っております。

そういう点で、これは非常によくまとまって、定性的なものについてはこういうものがありますよと。定量的なものについては数は勘定することなのですが、やはりこれを見ても、仕分けのときに出された宿題にまだ少し足りないなと思うのは、効果はなるほど、わかりますよと。でも、これだけの費用をかけるだけの効果なんですかと言われたときに、効果と費用の見合いはどうなんですかと言われたときに、これだけではなかなか難しいところですね。

効果と見合いで言う場合には、費用というのはお金ではかかっていますから、一番簡単なのは、効果がお金で測定できれば、費用よりも効果、お金が多いと言えば、これで損はしていませんということで明らかです。だから、そういったようなことができるかどうかということが1つ。

それから、それが非常に難しい、効果というものをお金で勘定は難しいということであれば、似たようなことをやっているほかのプログラムと比べて、つまり、効果は多分同じだろうと。だけど、コストはこちらの方が安いよといったようなことで、効果が同じだとすると、うちの方がコストが安い。安い必要はないんですけれども、少なくとも高くないということが言えればいいのかなどは思います。

そういう点で、資料5の留学と船事業ということで御意見を伺いますね。このときに、船事業のコストはわかっているわけですから、留学といっても長さがありますね。だから、その人がどのぐらい留学されたかということで、一般的には長ければコストがかかると考えて一律でいいと思うんですけれども、この人はこういうコストがかかっているんだろうと。それに対して、こういう効果があるとこの人は考えているということで、上手にアンケートをつくってやれば、コストはこれもこれもこういう効果があります。うちの方が効果が多くても構わないんですよ。だけど、ちょっと多いと。だけど、どのぐらい多いかと言われて、2割多いと言ってもそんなことはわからないと。だけど、うちの方が効果があることはたしかだと。コストを比較すると、コストは同じだと。そうすると、うちの方がいいでしょうと。要するに、向こうに説明して、納得していただくことが大事ですね。

もう一つは、コストのうち、どのぐらい国が負担すべきなんですかと。これもやはり答えなければいけない話ですね。これもどこかに上手に仕込んで、アンケートの中で考えるのか、あるいは既存の資料でそれが出るのか。つまり、お金をかけるだけの非常に大きな効果があるんだと。それはそうなんだけれども、個人に帰する効果もあるでしょうと。それは少し個人に持ってもらうでもいいのではないですか。それが1割なのか、2割なのか。今のところ1割ぐらいですね。あれがぎりぎり2割ぐらいまでなら、その負担をしていいということであれば、今度から2割負担で財務省にお願いするとか、そういう根拠になる

ようなもの。どっちみち、こんなものはざっくりしか出ないですよ。零点幾つなんていう数字が出るわけないですよ。ですけれども、何も無いと言えようがありませんから、そのところが出るようなものを更にこれにちょっと工夫をなさるといいのかなと思います。

久津摩参事官 先生の御指導もいただきながら、その辺りは工夫してまいりたいと思っています。

髙委員 あともう一つ、これから40年続いて、第何ステージかわからないけれども、これからやるときには、こういう付加価値をまた新たにつけますとか、今の国際情勢をかんがみて、21世紀に入って、時代も非常に大動乱の時代を迎えている中で、こういう付加価値をもうちょっとつけていきたいとか、そういうことも入れた方がいいと思いますよ。

牟田座長 あと、今のことで思いつきました。思いつきですけれども、これまで40年の歴史がある。これを今やめたら、外交も含めてどういうマイナスのインパクトがあるかと。そういうことも大きいのではないですか。やはり人材のネットワークの蓄積もあるわけですよ。あれがどんどん薄れていくわけです。意味がなくなっていくわけです。続けているから、やはりレットオフが続くので、事業がなくなってしまって、ネットワークだけ続くということはないと思うんですよ。せっかく今までの蓄積が台無しになってしまうよと。

だから、まるっきり同じことをやるとは言いませんけれども、少なくともこの形で残さないと、今までのせっかくの財産がなくなってしまいますよということも大事なのではないのでしょうか。

田中委員 それが一番効きますね。

牟田座長 竹尾委員、どうぞ。

竹尾委員 アンケートなどもいろいろ工夫してまとめていただいていると思うのですが、お聞きした印象では、一応、全部フラットにそれぞれの国単位で同じような効果を測定しようとしている傾向が見えますが、そういう点も必要だと思うんです。

でも、先ほど、タイのお話もありましたけれども、同じ国でもステージが変わっていったりしますし、国によって、私は特に世界船のイメージですが、非常に先進国と小さな途上国が混在しているというよさがあるんです。そこへ来る人たちは、よく言えばダイバーシティ化。非常に多様でして、例えば本とかインターネットにもろくにアクセスできないような人も来ています。ですから、私はアドバイザーとして課題をみんなに平等に与えたつもりですけれども、そもそもそんなことにやる気もなければ、できないという人たちもいるんです。やって当然という人たちもいる。

だから、そういうような期待度ですとか、その後の仕込みというか、効果というものも、実は随分先進国とかヨーロッパの人たちと、例えば太平洋の小国とかアフリカの国から来た人たちの間ではインパクトも違いますし、ネットワークの形も違うと思うんです。そういうようなことをもう少しきめ細かく浮かび上がらせるような工夫が、アンケートとか事後記述するとか、そういうようなことがうまくできないかなという印象を持ちました。

久津摩参事官 わかりました。

牟田座長 今のお話は、この効果のまとめでも少し考えられるのではないのでしょうか。

久津摩参事官 そうですね。まとめのときにちょっと。

牟田座長 先進国の人に対する効果と途上国の人に対する効果とか、あるいは中国、韓国のように日本と非常に難しい問題を抱えている国との効果とか、何かそういうものがあると、今、竹尾委員がおっしゃったように、いろんなところが。

竹尾委員 ついでに言いますと、日本の青年についてのインパクトも、例えばこの中には、男性、女性とかも入っていないですね。実は女性の参加者が非常に割合としては多くて、かなり背水の陣で来ていますね。会社を辞めて来たりとか、ほとんどプー太郎だと言ったことがありますけれども、この豊かな日本でほとんど失業して来ている人たちばかりですよと言うと、みんなびっくりしますね。

男性がなぜ少ないかという、企業を辞められないし、あとは役所から派遣されて来たりする人はいますけれども、女性のほとんどは学生か失業者です。まれに外資系とかからはいますがね。

久津摩参事官 辞めてまで来られる方もいますが、ただ、学生が多いです。

竹尾委員 悪い意味で言っているのではないんですけれども、それぐらいの覚悟を持って来ているということで、女性のエンパワーメントというものをまざまざと見せられる場所でもありますし、就業事業というのがそれぞれの途上国と先進国と言いましたけれども、やはり先進国ですと有給休暇とか、こういうものを集めて、あるいは公務員であったり、非常に有利な状態で来ていますが、途上国になりますと、やはり非常に困難な状態で来ている人が多いです。しかし、夢は大統領だとか、南アの青年などはそういうことを言い放つわけですよ。だから、そういう青年は日本では余りいませんね。あながち夢でもなくて、近づいていくような感じもあるんです。

私が言いたいのは、そういう多様性が1つの大きな特色でもあり、ずっと強調されているのは、それを密室の船の空間で経験するという事は、言わば無駄な時間も大事だということです。エリートだけ集まって、インテンシブな研修期間ではないような側面がありますから、そういうところが浮き上がるような、そういうような効果測定ができればいいのではないかと思います。

日本の中でも、女性のことから言いましたけれども、地域によって首都圏にいる人たち、就業している人たちともう少し地方出身者で、応募者もすごく少ない県とかもあります。そういうところからアプライしている人たちというのは、やはり大分違うんです。それは各県で募集しているというシステムがありますから、満遍なく来ますから、日本の人たちの1つ特色は、会ったことがない県の人たちと一挙に仲良くなれる。もし平等なコンペにしたら、ほとんど首都圏とか関西とか、そういう集中したところの人たちが圧倒的に多くなると思います。そうではないような日本の多様性も確保しているということは、やはりこの内閣府なり、行政としてやっているということの強みの大きなものではないかと思えます。

牟田座長 田中委員、どうぞ。

田中委員 今、先生方のお話を聞いていて、確認というか、重複するかもしれないのですけれども、先ほどのプレゼンテーションを聞いていても、やはり一番は40年かけて、ほかに類のないブランドがあり、しかも、ハイコンペティティブだと言っていましたが、そこで選ばれるということに対する、自分たちは外交官だという言い方をしていましたけれども、セルフエスティームみたいなのところがあると思うんです。

ですから、そこを一般論の国際交流だけではなく、政府がやり、これだけのエスタブリッシュメントされたものであるからこそ自信がついているというような質問を入れた方がいいと思います。

牟田座長 私も先ほどの参事官のお話で、そんなにこの事業が東南アジアで有名だとは知りませんでした。大変失礼いたしましたけれども、やはりそういう東南アジアの方で、こういう事業があって、試験が難しく、これに通ることが非常に名誉だと思っていられる若い志のある方がたくさんいるということは非常にいいことで、それはこの事業の継続にとっては非常に大きな力になると思うんです。それが何か上手にわかるといいなと思います。

田中委員 だから、人格的側面に入れるのかとか、あとは、費用便益分析に向いている項目は何かと思って聞いていたんですけれども、意外と社会貢献とかボランティアは費用便益できるのでね。ただ、それは本流ではないですね。

牟田座長 勿論、本流ではないです。それは私もよくわかっています。お金のためにやっているわけではない。

そうは言っただって、この予算のないときに何でこれをやるんだと言われると、何か答えなければならないですね。そのためには、何か工夫は要するという事なんです。

鳶委員 今、竹尾委員が言ったように、男女比率とか、年齢比率とか、各県の比率とか、国がやっていることによって、そこがいろいろばらついているというか、そういう東京一極集中型ではない人たちが地方からも来ているんだと。それがまた地方の国際化ということにもつながっているんだとか、そういうようなデータがもしあるのだったら、そういうデータも入れて、特に「地方と国際化」など、やはりここでしかできない特色を中心に出したらどうかなという感じがするんですよ。

効果や何かはここに書いてある紙を見れば後でわかるわけだから、これをいちいち説明するよりも、何がこの特色で、ほかではやっていないことなのかということを出すべきだと思いますね。

牟田座長 今でも、地方の国際化というのは行政がやらなければならない話ですね。

鳶委員 それから、先ほど各国の首脳に手紙でも書いてもらったらどうかと言ったのは、過去に例があるんです。もう20年以上前の自民政権時代に、国際協力銀行が開銀と合併する話があったんです。それは開銀も嫌だったし、国際協力銀行も嫌だったわけです。それは銀行の性質が違うということもあったし、政治の都合に合わせて利用されて本来の機能が失われることを心配したからです。そういうときにどういう作戦をとったかということ、国際協力銀行は各国の首脳たちから、やはり国際協力銀行はそのままあってほしいという手

紙をいっぱいもらって、メディアにも多く報じられました。それが仕分けの場でも、そんなに各国の首脳たちが、国際協力銀行の役割を評価しているのかということを知りたくて知るところです。青年の船も首脳同士で決めたとすると、そういうことは非常に重要だと思いますよ。

これからどういうふうにするのか知らないけれども、もう一回議論をすれば、仕分け人やTV・国民を前にして、多分10分か15分の間でどれだけ印象的なプレゼンテーションができるかというところが勝負になるわけでしょう。あとは、そこで勝負にならないような、そこで説明できないことはなるべく資料に書き込んでいく、あるいは事前に説明しておくということなんだろうと思うんです。だから、そういうことも頭に入れながらやった方がいいのではないかという気がします。

牟田座長 そのほか、いかがでございましょうか。

田中委員 この整理をした上で、一番大事なところを強調して説明するという事ですね。

牟田座長 今、いろいろ御意見をいただきましたけれども、今日出されました資料、特に資料3、4と、これからやろうとしております資料5につきまして、検討の方向とか議論の整理につきましては、ただいまの御意見は入れるとして、基本的なところはこれよろしゅうございましょうか。

(「異議なし」と声あり)

牟田座長 ありがとうございます。

それでは、このような方向で、今、いただきました御議論も入れまして、少しブラッシュアップいたしまして、次の作業に進みたいと思います。

それでは、そろそろ時間でございますので、本日の議論はこれまでとさせていただきます、今後の進め方につきまして、事務局の方から御説明願います。

久津摩参事官 まず、次回でございますけれども、7月30日の月曜日14時からということとさせていただきます。

あと、今の座長のおまとめにもございましたとおり、資料3、4、5に沿って、事務的な作業は進めさせていただきます。その上で、次回、できたら中間報告のたたき台のようなものを作成させていただければと思います。

アンケート調査につきましては、今のお話も踏まえましてつくらせていただき、これは緊急にやる必要があるかと思っておりますので、事前にお送りさせていただきました上で実施をさせていただければと思っております。

以上でございます。

牟田座長 このアンケートは、早急にやるとして、幾ら何でも次の会議には結果は間に合わないですね。

久津摩参事官 そうですね。ちょっと難しいかもしれません。

牟田座長 これは、ここに書いてありますように、一応これは過去に留学をした経験のある方ということで、こういうのは台帳か何かがあって、すぐにわかるんですか。

大橋副会長 全部を把握しているわけではないので、大体主な人たち、過去数年ぐらいですと、ナショナルリーダーですとか、リーダーからの情報である程度はわかるのですが、これをもし行うとしましたら、各事業のメーリングリストがございますので、そこに投げて、留学経験のある方は短期、長期に関わらず投げてくださいますという形をすれば、今、実は事業継続のための署名活動などもしておりますので、どういうことが行われているかということは会員は把握していますので、それについては、ある程度の返答はあると思います。

ただ、どのぐらいの返答率を御期待されるかということになると、例えば1週間で行ってということであれば、その1週間という短期間の緊急アンケートだということを想定しながら、参考資料として使っていただくというレベルであれば、30日までにすべてのということではなくて、ある程度のところの数字は出せるかと思います。

なおかつ、30日までの委員会のところに何らかの数字がないと、きっとまとめられるときの根拠の参考にならないと思うんですけれども、もう一つは、アンケート自体をいつまでにまとめるべきものという目標値を2段階のようにしていただいて、この30日の委員会までに1つの委員の先生方への参考資料となる部分。それから、もう少し時間をかけてもいいですよということであれば、次の行政事業レビューの対応のためのときまでのという形で資料を集めるという努力はできるかと思います。

田中委員 クエスチョネアは。

大橋副会長 クエスチョネアをどれだけいただけるかによると思います。

田中委員 今ので結構イメージできましたけれども、かなり流動的にやらなくてはいけないですね。

久津摩参事官 早急に、今日、明日中にでも、私どもの方で案をつくりまして、御覧いただければと思っております。

牟田座長 早めにつくっていただいて、サンプルをどうセクションするかというか、具体的にどういう人に聞くかという作業は事務局の方でやっていただくとして、こういう質問をしようというのは早めにやっていただいて、何度かやりとりをしてやらないと、つまらない質問書をやったら、つまらない結果しか出ないんですよ。

田中委員 2回、3回とできませんのでね。

大橋副会長 質問のスタイルを変えた形で、どういう意味でやるのかということを示しつつ。例えばこの検討会からいろいろな効果の測定の基のためにやりますということを示して、アンケートを出してから1週間以内の期間ということについては、対応は可能だと思います。

田中委員 多分、相当協力してくれそうな感じはあるんですけれどもね。

大橋副会長 例えば来週の頭にいただけるということであれば、週が明けた委員会当日の朝10時の集計で、午前中の間に集計をして、午後の委員会に間に合わせると。質問数にもよりますけれども、そういう緊急的対応は、もし委員会の基としてほしいというお話であれば、来週の頭、火曜日ぐらいとかいただければ、対応は可能です。

田中委員 サンプル数はどのくらい予定されていますか。

大橋副会長 メーリングリスト上で把握している数は、大体 2,000 人くらいいるんですけども、ただ、その中で留学した人がどのくらいいるかということまでは、申し訳ないですが、具体的数を把握しているわけではないです。

田中委員 仮にその 2 割だったとしても大丈夫だと思うんですけどもね。

牟田座長 だったら、留学したかどうかを 2,000 人としますと、その 2,000 人の人の中で留学した人を更にピックアップするというのも手間がかかりますね。そうしたら、もう 2,000 人に投げてしまって、その中で留学の御経験のある人はこっちも答えると。こっちの部分は全員が答えるとやった方が早いですよ。

大橋副会長 過去 10 年ですと、メーリングリストの加盟者はほとんど入っていますので、その前になると、ちょっとメーリングリストの状況がさまざま差が出ますけれども、過去 10 年ですと、メーリングリストで把握している状況になっていますので、もしよろしければ、あらかじめするということになりましたら、こういうアンケートが行われるので、送られた際には返信してくださいということ予告のメールを流させていただいて、その上で流すということをするれば、1 回ですと、なかなかメーリングリストというのはスルーしてしまうケースがあるんですけども、あとは、今、事業参加年度ごと、事業ごとに個別のメーリングリストもできていますので、そちらを使いながらいけば、ある程度の返答率はあると思います。ちょうど先週、実はこの事業レビューの結果と検討委員会ができていますというレターを 1 万人全員に出したところですので、そういう状況は、メンバーは把握している状況にはなっております。

牟田座長 それだったら、とにかく余り留学した人だけに限らずにやってしまった方が手間がないのではないですか。あとで比較をすればいいので、質問だけ工夫すればいいですからね。それで流してしまって、次回の委員会までに返ってきたところで、中間集計でもいいから、何か見せていただければありがたいし、それが無理なら無理で仕方がないのでね。

久津摩参事官 今のお話を前提に、今日、明日中につくってみたいと思います。

牟田座長 それでは、そのようなことでよろしゅうございましょうか。

(「はい」と声あり)

牟田座長 ありがとうございます。

それでは、今日は大変インテンシブに話が進みまして、次回の作業の手順につきましても大体合意を得たところかと思えます。

それでは、本日の議題は以上でございますので、本当にお忙しいところ、ありがとうございました。次回、またよろしくお願ひしたいと思えます。